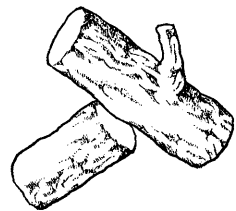


今、思うこと

山下 恵美



私は縁あって保育の世界に入ることになりましたが、大学卒業後すぐに幼稚園に勤めたわけではありませんでした。それは、何気ない一言や行動が、子どもの人生や人間形成に大きな力を及ぼしてしまうこの職業に、自分のような者が携わって良いのか自信がなかったからです。正直に言えば、責任の重さにこわさを感じていたのかもしれない。

そして、保育者として園生活を送るようになって四年たった今も、保育者の言葉の重さを実感させられる

ような場面にたびたび出会い、考えさせられています。実際に子ども達をまえにして一層悩ませられることは、話を聞いている相手が一人ではなく、十人十色、感じ方や受け取り方が本当に違っていることで、響いて欲しい子にはさほど響かず、そうでない子に響きすぎてしまうということが、案外多くあるように思います。次に挙げるエピソードも、その一つだと思いますが、心に残っていることなのでお話ししたいと思います。

三歳児、二十六名のクラスです。二学期に入り多くの子ども達が、二、三人の友達と安定した関係を持ち、小集団で遊びこめるようになってきた頃のことです。T君はまだうまく友達にかかわることができず、突然、友達遊びを壊したり、近くにいた子を押ししたり叩いたりして、トラブルになることがよくみられました。また、「**のばかやろう」などと、荒々しく相手を傷つけるような言葉を使う場面も多くみられました。私はT君の荒々しい言葉使いが気になっていましたが、注意してなおすことができるような状況ではなくそのままになっていました。ところが、しばらくして、他の子ども達もおもしろ半分に、人を傷つけるような言葉をまねして使うようになり始めました。その状況は、ほうっておくわけにはいかないので、クラス全体の問題として取り上げてみることにし、子ども達の前で、次のような話をしました。

T みんなは、ばかやろうっていわれたらうれいですか？

C うれしくない、いやだ、バカって言った人がばかなんだよ、などなど。

T 先生は、ばかって言われたら、ここが（胸をさす）痛くなるの。頭が痛いときや、おなか
が痛いときには、治す薬があるけれど、い
なことを言われて痛くなったお胸には、付
けるお薬がないんだって。みんなも、いやなこ
とを言われたり、意地悪なことを言われて、
元気が出なくなることがあるでしょう。先生
は、自分が言われていやだと思うことは、お
友達にも言わない方がいいと思うの。みんな
は、どう思う？

C 言わない方がいい。

T よかった。じゃあこれからみんなで気をつけようね。

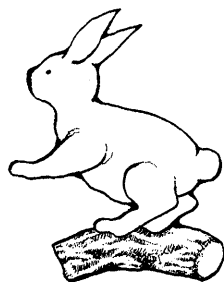
このような内容の対話でしたが、子ども達は真剣に耳を傾けてくれました。

さて問題は、S君に起ききました。S君とT君はトラ

ブルが多く、二人が近くにいるときは、心配で目が離せませんでした。トラブルになるとS君がいつも泣いていました。そのうちにS君は、T君とのトラブル以外でも泣くことが増えていきました。あまりにちょっとしたことでも泣いているので、仲の良い友達との関係も悪くなりはじめていました。ある時、またS君が泣いていました。「どうしたの?」と聞くと「T君がSのバカって言った。Sのお胸が痛くなるの」そういつてなおも泣いています。S君のこの言葉に、私はドキッとしました。どちらかといえは、T君はすぐに「ばかやろう」などとという言葉を使ってしまう方です。もしかしたら、そのたびにS君の胸は痛くなっていたのかもしれませんが。おそらく、私の話を聞いて以来、S君の胸は何度も痛くなっていたのでしょう。私の話は、S君には響きすぎてしまったようでした。S君がよく泣くようになったのは、友達のことと似た言葉に敏感になったことがきっかけではなかったかと思えます。その後のT君とS君ですが、T君は友達と

関わりがみられるようになり、落ち着いて園生活を送るようになりました。S君も、少しのことで泣いたりしないように励みますなどして、いまでは、ほとんど泣くことはなくなりました。T君とS君が一緒に遊ぶ姿もみられるようになり、二人が一緒にいても安心して目を離せるような状況になりました。

S君の気持ちに気がつくことで、クラスを良い集団へと向けていくことも大切なことだけれども、それとともに、一人一人の子どものことも大切に考えていかなければいけないのだということをあらためて感じさせられま



した。そして、集団と個々の両方を育てていく難しさを、一層実感させられました。自分の発した言葉が、子ども達にどれだけの影響をあたえているのかを忘れず保育していかなければいけないのだと再び感じさせられた出来事でした。

さてもう一点、今思っていることをお話しさせていただきます。手遊びをしたり、絵本を読んだり、話し合いなどをする時、全ての子ども達が、私の方に集中してくれる瞬間があります。そんなとき、私は複雑な思いになります。子ども達に聞く態度をみにつけさせたり、話を徹底させるためにも、しっかりと聞かせることが必要です。しかし、子ども達の前に立つ自分に、ときどきゾツとすることがあるのです。それは、ほんの少しでも優越感や満足感を感じている自分が居ることに気がつくからです。子ども達よりも上の立場にいて、思ったように子どもを動かそうとする自分に気づき、自己嫌悪に陥ることがあります。確かに、子ども達は、生まれてからまだ三年しか経って

いませんで導くべき場面が多いことはわかっています。そして、それが私の仕事であることもわかっているつもりです。しかし、感情や利害観を保育の中に持ち込んで、子ども達に接したり、導いてはいけないと思うのです。そうは思っていますが、まだまだ未熟な私は自分に負けてしまうことが多く、何度も反省を繰り返しています。次に挙げるエピソードも、反省させられた一場面です。

三学期、イメージの世界で遊べる劇遊びをと思い、ペープサートで「おおきなかぶ」をつくりました。ペープサートは作成が容易なわりに、何度も楽しめて、子ども達にも扱いやすい教材です。私は、ペープサート劇が好きで、子ども達にも何度か見せていました。

さて、自由遊びの時間に少しずつ作った「おおきなかぶ」は、子ども達の興味を引いたようでした。「ほく、かぶのやく」「あたし、おばあさん」などといつて役決めをし、「うんとこしょ、どっこいしょ、それ

でもかぶはぬけません」などとやっています。「こんどぼく、おじいさんになる」「あたし、いぬ」などと、役を替えて何度も何度もやっています。せっかくの劇だったので、お客さん席を設けました。

さてさて、三歳児は、人前で発表するのにも「やりたい、やりたい」とおおさわぎです。子ども達は、うまく発表するというよりも劇をやることだけで満足なようです。しかし、そこで私の利の欲が出ました。

せっかく人に見せるのだからできるだけ良い劇を見せたい、という本当に子ども達には失礼な思いです。大きな声ではつきりと言わせなければだとか、笑ったり、ぼーっとしないでちゃんとやらせなければだとか、全く子ども達の楽しさを半減させるような勝手な思いです。保育者が「もつとちゃんと」と思ってしまうことで、子ども達は何を得て何を失うのでしょうか。

「もつとちゃんと」は、ふっとしたときに現れて、私を惑わせます。子どもの姿を見極めて、「もつと

ちゃんと」とうまくつきあっていかなければいけないと思えます。目の前にいる子ども達の興味はどこにあるのか、そして、子ども達の成長を願う上で大切にすべきことは何なのか、と常に考えていられる保育者でいられたらと思います。

三歳の子ども達にとって、保育者の意見というものは、たぶん絶対的なものがあると思えます。お山の大将になることなく、時に、理解し合える友達であり、母であり、人生の先輩でありたいものです。そして、客観的に自分をみつめられる保育者であり、一人一人の子どものために思い悩み、少しの成長を祈り喜べるような保育者でいられたらと思います。

(市川学園第二幼稚園)